

社会科における資質・能力の育成

平成28（2016）年12月21日付けで、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（以下は、中教審答申）が公にされた。2030年ごろに成人する子どもたちが、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けることができる「生きる力」を育成することが目指されている。その中で、教育目標としての資質・能力の3つの柱（知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等）と方法としてのアクティブ・ラーニングが明示されたことは重要な改訂ポイントである。中教審答申ではアクティブ・ラーニングを進める視点として、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つをあげている。ここでは、社会科における深い学びを実現するための留意点について検討してみたい。

1. 「社会的な見方・考え方」を働かせた学習

中教審答申では、「深い学びを実現するためには、『社会的な見方・考え方』を用いた考察、構想や、説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である」と述べている。そして『『社会的な見方・考え方』を働かせたイメージの例』として、「考えられる視点例」「社会、地理歴史、公民における思考力、判断力」「視点を生かした、考察や構想に向かう『問い』」「考察、構想した結果、獲得する知識の例」を資料として提示している。これは、ある「視点」に着目することによって「問い」が見出されること、「問い」が子どもたちの学習を考察や構想の活動へと向かわせること、「考察・構想」することによって「知識」を獲得すること、つまり社会科授業における探究の学習プロセスを示したものだと考えられる。

例えば小学校3年生「市の様子」の学習において、追究の視点として「分布」に着目した場合である。授業では「松江市では工場はどこにあり、どのように広がっているだろうか」「駅の周辺にビルやお店が多いのはなぜだろうか」という問いが出される。分布という視点は、問いに変換することで授業に位置づけることができる。この問いに対して子どもたちは資料を集め、活用しながら考えていく。そして「いくつかの組み立て工場を中心に部品工場が集まり、工場が盛んな場所がつくられている」「駅は交通の便利がいたため、人がたくさん集まるのでビルやお店が集まっている」という立地条件や駅の機能にかかわる知識を獲得する。

2. 「視点」と「問い」の質の向上

以上のことから、新しい社会科では「視点」と「問い」が重要になってくる。追究の「視点」とそれを生かした「問い」の設定は、「社会的な見方・考え方」を働かせた学習の出発であり、子どもが獲得する「知識」は「視点」と「問い」の質に関わってくる。授業者は着目する「視点」と実際の授業で子どもに発見させる「問い」を吟味することが必要である。小学校社会科から中学校社会科へと進むにつれて、「視点」と「問い」の質を高めていく系統性への配慮も求められる。どのような「視点」に着目するか、子どもに発見させたい「問い」は何かを実践的に検討する附属小・中学校社会科部の研究に期待したい。

（共同研究者：教育学研究科、加藤 寿朗）